



えんじょうじ
場所：奈良市、円成寺／日時：2018年6月5日

「とにかく、やることはすべて 徹底的にやっていますね」

姿に戻すように、庭園の復元整備をしました。整備前はスギやモミの木などが鬱蒼としていて、中島にも背の高いアカマツがたくさんありました。ほんまに森みたいでしたね。植栽は鬱蒼としていたけど、庭園の骨格はそのままの状態です。よく残っていました。庭に時代が必ず重なりますからね。平泉の毛越寺庭園でも、江戸時代になると伊達藩がスギを植えて整備しますよね。もう300か400年ぐらい前のことですが、庭園の場合は必ずどこかで人の手が加わってしまいます。そういう意味で、ここはよく古い形を保っていると思います。

整備した後は青竹の柵護岸が見えて、スカッと開かれた感じで綺麗になりました。でも40年も経つと、やはり護岸も後退するし、低木類も大きくなって池に張り出てきましたね。きょうは久しぶりに来ましたが、また雰囲気が変わりましたな。

●徳村さんは今も文化財庭園の復元整備をされていますが、円成寺では具体的にどんなことをされましたか。
徳村…今は、測量は測量士に、発掘は考古学者に、設計は



徳村盛市（とくむら・せいいち）

1948年、京都市に生まれる。造園家、庭師。同志社大学卒業後、森蘊に師事。森蘊とともに、文化財に指定された庭園の復元整備事業に携わると同時に、森蘊の作庭活動を支えてきた。現在は庭匠植清代表。2015年12月に文化庁長官表彰、2018年3月に黄綬褒章を受章した。

●円成寺庭園は平安末期まで遡る浄土式庭園です。1973年に名勝に指定された直後ぐらいに徳村さんは森先生と一緒に復元整備をされたようですね。
徳村…そうですね。できるだけ昔に近い

設計管理事務所に任せますよね。すべての作業が専門家ごとに分解されてしまいました。しかし、当時はそんな組織なんか全然なかったんですね。森先生と村岡正先生と相談しながら、地形測量から、図面作成、復元整備まで、最初から最後まで一緒にやっていました。

最近「保存整備工事」という言葉もよく使われるみたいですけど、森先生のときはひたすら「復元」でした。とにかく、森先生の復元整備工事はいつも測量から始まりました。だいたい、測量図なんて存在していませんでしたからね。もちろん、お寺に保管されている古い絵図を参考にしていました。森先生の測量では必ずレベルも測っていました。時間的に考えればもったいないのですが、できあがった図面を渡されて整備をするのと、自ら実測した庭を整備するのと、やっぱり違いますね。整備が始まる前からある程度イメージできますから。

もちろん、最近の図面はまったく狂いのない、完璧な図面です。我々がやっていたときは、いちいちテープを張って、池を一周していたから、そこまで精密ではなかったか

もしませんが、最終的には不思議と合っていましたね。森先生も村岡（正）先生も偉かったと思いますよ。そういうえば、測量は山中（功）さん「134頁を参照」もよく手伝っていましたな。

測量をしてから、今度は発掘調査。当初の池の汀線を確認するために、ところどころにトレンチを入れて、断面で土の層を見ます。それで昔の池の形というか、輪郭がわかります。しかし、ここは玉石が全然なかったのです。毛越寺でも、白水阿弥陀堂でも、平等院でも、玉石の州浜ですが、ここはなかったですね。鎌倉や室町時代になると、金閣寺に代表されるような石組護岸になりますが、それは比較的、新しい手法ですね。円成寺の場合は州浜が出てこなかったから、土留め代わりに、杭と竹で柵護岸を作りました。とにかく、新しい石を取り入れていません。

発掘の次は、泥上げをしました。ものすごいたいへんな作業でした（笑）。もともとの池底は粘土で固めているはずですが、何百年間も溜まってきた落ち葉や、流れてくる土などが泥になってしまつて、たいへんでした。それから、中島の松もたくさん切りました。大きくなり

とにかく、細かいところまで指導していました。今は、一つの復元工事に造園、建築、考古学などで先方が4、5人もいますが、昔は森先生だけでしたから、一人で決断することが多かったですね。もちろん、委員会もありましたが、森先生の一言ですべてが決まるような感じでしたね。

石の据え方や木の植え方とか、微妙なところまでこだわっていましたね。石の向きと傾きぐあい、木の枝ぶりも「もうちよつと、もうちよつと」とか言つて、なかなか決まりませんでしたね（笑）。あまり人工的な作りは避けていました。私が言うのも偉そうですが、自然の流れをつかんでいましたね。

●40年前に整備されてから、円成寺庭園は大きく変わりましたか。

徳村…そうですね。背景の木はどうしても大きくなりますが、中島の松と、護岸の低木類はちゃんと手入れされているので、今も綺麗に庭を見渡すことができます。ただ、護岸はかなり侵食されましたね。水の力というのはすごいものですね。ずっと動いていますから。鯉の影響もあると思

すぎた松がたくさんあったから、切るしかなかったんです。思いきつてやったことは今もよく覚えていません。倒してから枝を落として、そして、引き出しましたね。それもないへんでしたわ。

●整備の工事が始まるまでがたいへんでしたか。

徳村…たいへんでしたが、水源が枯れていないのが救いですね。歴史的な庭園で水源が枯れているところは多いので、その場合はポンプを利用したり、別の水源から導入したりする必要がありますが、円成寺の場合は今も綺麗な水が流れています。だから、泥上げをした後、池底の粘土を修理しただけです。最近は大タキの工法を利用して、石灰を使って固めたりしますが、森先生のときは粘土しか使いませんでした。

●森先生は現場でどのような指導をされていましたか。

徳村…森先生は熱心に指導されていました。日帰りでも、朝から晩まで一日一緒に作業していました。地方に行くくと、泊まりがけで指導したり、スケッチしたりしていました。



3. 柵施工作業



2. 伐採作業



1. 浚渫作業



5. 剪定作業



4. 中島の植栽作業

円成寺庭の整備工程（『名勝 円成寺庭園 環境整備事業報告書』）



森蘊による円成寺のスケッチ（1976年3月）（「森蘊旧蔵資料」奈良文化財研究所蔵）

いますが、護岸は40年間で50センチぐらい後退してしまいました。また、整備をしたときに池の北側に平橋をかけましたが、それも無くなったんですね。

●徳村さんは歴史的な庭園だけではなく、森先生の作庭の施工もされましたね。

実際にお寺に入り込んで、測量も史料も全部自分で研究材料を集めて本を書いていましたから。立派だな、ほんまに感心しましたな。

なんでも徹底的にやるというのが、森先生の特徴ですね。野球に関しても、巨人の大ファンでしたね（笑）。レベルブックに打数と安打、全部記録していましたよ。出張先で夜に電話して「どうですか、巨人勝ってますか？」と聞いていましたね。巨人負けたら、めちゃくちゃ機嫌が悪かったですね（笑）。

それと、切手のコレクションを見せてもらったことがあります。これはまたすごかったですね。私も子供の頃から少し収集していましたが、森先生のアルバムを見たら、もうあかん、これだけのものを集められるはずがないと思えましたね（笑）。ずっと大事にしていました。

とにかく、やることはすべて徹底的にやっていましたね。たとえば、写真を撮っているところは見たことがないですわ。カメラを一切使わない。すべてスケッチでしたね。写真は後からじっくり見ると、奥行きを感じると石の大ききとか、ものすごく狂ってしまいます。しかし、森先生のス

徳村…それも多いですね。久留米市まで、一緒に庭作りしに行きましたからね。しかし、森先生の庭は古いですよ。新しいものを作っても古いです（笑）。古代の日本庭園研究が作庭に生かされているのでしょね。

石を探すときは「動物的な石を集めてください」とよく言われていましたから、やはり『鳥獣戯画』をイメージされていきましたね。法華寺の子犬の庭も、和歌山城の二の丸庭園もそうですね。奈良の石田邸と豊明市の古川邸で巨大な切石を利用して、現代的な庭を試みたこともありですが、あとはみな古いですよ。久留米の遍照院庭園や創世苑（現・ホテルマリターレ創世久留米）もそうですが、それぞれの時代の特徴を一つの庭にまとめることもされていきました。まあ、私にはそう感じたんですね。

●徳村さんが森先生に惹かれたところを教えてくださいな。すか。

徳村…森先生はものすごい苦労されたと思いますよ。ほら、今は庭園の研究といえば、参考文献がたくさんあるから、それらを集めるだけで本一冊書けますね。森先生の場合は、

ケッチには狂いがない。これはやっぱり違うな、普通の人が真似できないところまで追求するなと思いました。

●徳村さんは2015年に文化庁の長官表彰を受けたそうですね。

徳村…あれは少し前ですね。2018年に今度は黄綬褒章をもらったんですね。造園関係は国土交通省から受ける方が多いようですが、文化庁から受ける方はなかなかないそうですね。しかし、そういう晴れ舞台には慣れていないものですから恥ずかしいですね。冬季オリンピックのゴールドメダリストや、EXILEのHIROさんとかも来ているので、一人だけ何かちょっとこの場にふさわしくないやつがおるなと思っただけですが、最後に天皇陛下にご拝謁できました。それも、森先生のおかげですね。

しかし、最近は庭園史を研究している先生も少なくなってきましたし、造園界もだいぶ変わりました。昔のやり方と違うな、とつくづく感じますね。

（了）